5　大和田新田の屋号とムラの姿

蕨　由美

1 かわりゆく大和田新田の姿

かつての大和田新田は、明治初期の迅速測図で眺めると、「佐倉街道」（現国道 296 号＝成田街道）に沿って、西の新木戸寄りと東の大和田村との境にそれぞれ十数軒ぐらいずつ人家が並び、その背後にはただ山林と畑が茫漠と広がっている風景が、髣髴としてくる。

現在の大和田新田は、以前から人家や商店が並ぶ街道沿いに加えて、平成８年（1996）４月に開業した東葉高速鉄道の緑が丘駅周辺の大開発など、都市化が最も激しく進行している地域である。かつての下野牧に隣接した山林・芝地に営まれた近代の牧場や戦後の広い工業団地も、さらに再開発で変わろうとしており、近世の旧村の姿はもちろん、戦前の街並を復元することすら難しくなっている。

1　神明社付近からの緑が丘駅前のビル・マンション

大和田新田には、戦後の分家や商工業者、旧村のコミュニティに受容された東京東部から移住した酪農家など近年の屋号もある。地域研究はムラを知ることであり、その基礎としての旧家の屋号調査と地図の作成は歴史・民俗研究に欠かせないが、一方都市化の進んだ地域では、個人情報の保護にはつとめて配慮する必要がある。今回の屋号調査ではこの点を考慮し、現時点ではなく、昭和四年（1929）の地図に記されている屋敷の屋号を復元することにとどめた。

なお、近代の大和田新田の特徴として昭和初期から昭和の終わりごろまで興真牧場をはじめとする酪農が盛んで、昭和四年の地図でも、上区の「習志野牧場」と下区の「一本松牧場」の名が記されている。ちょうどその頃大和田新田に新設され、その後、興真牧場第一・第二・第三牧場に拡大し、乳牛 600 頭を飼育、6.6 万㎡の大牧場に発展する興真牧場（現「興真乳業」）の黎明期の姿である。また同図では、西の船橋市境に野馬除土手が連なっているが、その一部は日大船橋を望む台地の西縁に現存している。

2 屋号調査について

屋号調査は、旧家の聞き取り調査を中心に村田一男会長、石井尚子会員と筆者が主にかかわり、他に畠山隆・佐久間弘文会員の情報を参考に、村田会長が素案をまとめ、筆者が作図した。（P33 ～ 35「大和田新田の屋号地図№ 1 ～№ 3」参照）

また、江戸時代の古文書との照合を試み、村田一男会長、畠山会員に史料などを紹介いただき一覧表を作成した。（P24 表 1「大和田新田の屋号の記載がある江戸時代の地方文書」 P25 表 2「江戸時代の地方文書に記載されている大和田新田の屋号」参照）

なお、ここでいう屋号とは、家屋敷の各戸につける姓以外の通称のことである。

表１　大和田新田の屋号の記載がある江戸時代の地方文書

	文書暦年 西暦　年	文書名	出典：『八』は『八千代市の歴史　資料編』
1	享保 10 年 1725	中野牧御鹿狩御役人附ケ并立切勢子割	『八』近世Ⅱ-49 高津・江野澤家 1
2	享保 20 年 1735	（芝地）預リ申証文之事	『八』近世Ⅰ-62 白井家 109
3	文化３年 1806	照誉代開帳日記	『成田山新勝寺史料集』 第 5 巻
4	文化５年 1808	去卯村小入用帳	『八』近世Ⅰ-16 白井家 68
5	文化 11 年 1814	検使賄書入用議定一札之事	『八』近世Ⅱ-83 白井家 114
6	文政２年 1819	組内諸入用覚帳	『八』近世Ⅰ-17 白井家 88
7	文政９年 1826	積金講人数覚	『八』近世Ⅳ-121 白井家 93
8	嘉永元年 1848	小金野鹿狩に付世話役連印請證文	『習志野市史』第２巻 史料編（1）
9	嘉永２年 1849	遠手村々へ打合議場書	『習志野市史』第２巻 史料編（1）
10	嘉永２年 1849	鹿狩出人足并心得に付実籾村等への触書	『習志野市史』第２巻 史料編（1）
11	嘉永３年 1850	石亀沢用水溜池開発一件につき願書	『八』近世Ⅰ-82 吉橋･高橋家 10
12	安政元年 1854	下野牧付村々廻状写	『習志野市史』第２巻 史料編（1）
13	安政６年 1859	吉橋村田地頼母子講積立金控帳	『八』近世Ⅳ-132 吉橋・湯浅家 3-53
14	文久３年 1863	月待中諸懸リ物帳	『八』近世Ⅳ-118 白井家 95
15	文久４年 1864	生長祝儀并節句覚帳	『八』近世Ⅳ-119 白井家 96
16	慶応３年 1867	吉橋村取替させ対談議定書	『八』近世Ⅱ-96 吉橋･高橋家 20
17	巳年正月 不明	下野牧野馬除土手破損につき自普請願	『八』近世Ⅱ-72 白井家 159

表２　江戸時代の地方文書に記載されている大和田新田の屋号

文書中の屋号	文書中の組名	文書中の肩書き（○は屋号のみ記載、空欄は記載なし）									
文書番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
西暦		1725	1735	1806	1808	1814	1819	1826	1848	1849	1849
暦年		享保10	享保20	文化３	文化５	文化11	文政２	文政９	嘉永元	嘉永２	嘉永２
善兵衛	善兵衛組		名主		名主	○		世話人			
峯吉					百姓			○			
庄兵衛					百姓			会主			
太（多）兵衛			請人		百姓						
儀左衛門				世話役附木屋	百姓			○			
重郎兵衛					百姓						
長右衛門					百姓						
勘兵衛					百姓			○			
藤右衛門					百姓代			○			
佐兵衛					組頭			世話人			
庄右衛門							○				
治郎右衛門											
市郎兵衛								世話人			
加左衛門											
勝右衛門											
佐右衛門											
久兵衛											
平七			預リ主								
勘重郎			請人								
弥三郎											
佐五兵衛	佐五兵衛組					名主		世話人	名主	名主	名主
甚兵衛						組頭		○			
甚右衛門								世話人			
藤助								世話人			
吉兵衛								○			
源右衛門		世話役									
要右衛門								○			
佐平治											
平蔵								○			
庄左衛門		世話役									

調査・作表＝畠山隆・蕨由美

文書中の肩書き							現在の推定屋号（苗字）	地区
11	12	13	14	15	16	17		
1850	1854	1859	1863	1864	1867	不明		
嘉永３	安政元	安政６	文久３	文久４	慶応３	巳正月		
			○	（主）		名主	ゼンベエ（白井）	上区（笹塚）
							ジヘイ（湯浅）	上区
			○	隣			ショウベエ（白井）	上区（笹塚）
			○				タヘイ（中島）	上区
				村			ギゼム・附木屋（鈴木）	上区
								上区
		預主		村		百姓代	チョウエム（山田）	上区
				村			カンベ（山田）	上区
			○				トウエム（中島）	上区
			○			組頭	サヘイ（山田）	上区
								上区
組頭			○	村			ジロエム本家（湯浅）	上区
			○				イチロベエ（鈴木）	上区
			○				カゼム・大工（鈴木）	上区
			○	村			カツエム（中島）	上区
			○				サエム（小林）	上区
	山崎屋						山崎屋キュウベ（小林）	上区
								上区（大木戸）
			○	村				
惣代名主	名主	請人名主		村	扱人名主		サク・サゴベイ（小林）	下区
							ジンベエ（鈴木）	下区
							ジンニム（小林）	下区
百姓代							トウスケ（鈴木）	下区
							キチベエ（佐藤）	下区
							ゲンニム（澤田）	下区
							ヨエム〈中村）	下区
				村			サヘジ（小林）	下区

兼業を含む農業以外の商工業を営んだイエではその扱う商品にオケヤやコナヤなどと「屋」をつけて通称として用い、この「○○屋」という屋号は、現在、その生業に従事してなくても家名として残っている。

また、明治維新前は武士と特に許された者以外が苗字（例として小林・斎藤など）を名乗ることが許されなかったことと、「○○衛門」などの古代の官職名に由来する名乗り名を家長が代々襲名することが多かったので、東日本の農家ではこの名乗り名が屋号（家名）として、公私共に苗字の代わりに用いられてきていた。一軒のイエで複数の屋号を持つ場合も多いが、文書や寺社の石造物などに記されるのは、主にこの名乗り名である。

また明治以降もムラ内には同姓が多く紛らわしい上、農村ではイエ制度も維持されたことから、現在でもムラ内では姓に代わって屋号は生きつづけ、「○ニム（＝○右衛門）」、「○ゼム（＝○左衛門）」「○ベエ（＝○兵衛）」と呼び合い、また「○○シンタク」と称する分家も微増しているのが現状である。以上の点を踏まえ、大和田新田の屋号とムラの姿について述べたい。

3 文書にみる大和田新田のムラの姿

大和田新田は、元禄以前に新田開発された村であるが、下野牧に接していて芝地が多く地味が悪かったらしく、「元禄郷帳」では無高。「天保郷帳」では 558 石で幕府領以外の除地は、神明社・八幡社・阿弥陀堂とある。正徳元年（1711）段階でも高入れされず、1 反当り永 53 文を納めているにとどまる。

地図で見ると、村の南側は高津村、北側は吉橋村や麦丸村に囲まれ、村境は深く侵入した谷津田に接しているが、それらの谷津田は古くからの周囲の村が所有する水田で、「大和田新田」といっても、高津新田と同様に水田は少ない。

嘉永３年（1850）自村が所有する谷奥の沼沢地「石亀沢」を水田に開発しようする試みも、隣の吉橋村との事件となったが、その際大和田新田の村役人から代官宛に提出された願書には「村高 558 石６斗２升、皆林野請野新田にて（田は）一切これ無く候」と記されている。この事件は粘り強い交渉で示談が成立し、吉橋村の水田の用水に差し障りのない条件で、大和田新田側の水田開発が認められた。

これらの文書から、大和田新田はわずかな水田しか持たない新田村であるようにみえるが、一方、山林を切り開いた畑作と、街道沿いの地域特性を生かした様々な副業に携わる中で、分家や新宅、他村からの流入もあって「近来追々家数・人別相増・・」（嘉永３年「石亀沢開発願書」）というように着実に発展していくムラの姿が推察される。

2　文書に記された「佐兵衛」家と新木戸の八幡神社

街道沿いに長く連なる大和田新田は、現在も一本松付近より西半分の上区と

東半分の下区に分かれているが、江戸時代はそれぞれに名主がおり、その屋号をとって、「善兵衛組」（上区）と「佐五兵衛組」（下区）という２つの組を構成していた。

大和田新田で屋号が判明できる江戸時代の地方文書は表１のとおりである。

出典文書に記した「白井家」史料は、上区の名主であった笹塚の善兵衛家に伝わった文書で、大和田新田のムラ内の史料としては、現在唯一の貴重な文書である。八千代市に依託された白井家文書の数は 170 点ほどあるというが、現在、整理解読作業が終わり市史に掲載されているのは 14 点で、今回はこの公開されている文書を資料とした。

この白井家文書により、組頭の佐兵衛（写真 2)、百姓代の藤右衛門、長右衛門など上区の村役人の屋号や、親戚つきあいのあったムラ内の家の屋号が判明できる。

下区に関しては、村役人として名主の佐五兵衛、百姓代の藤助の名が吉橋村などの文書に記されており、他村や領主などに対しては、佐五兵衛が惣代名主として両組を代表していたと思われる。

ところで大和田新田を貫く佐倉道（成田街道　写真 3）は、さまざまな往来でにぎわう街道であった。表１の No.3 文化３年の「照誉代開帳日記」は成田山新勝寺本尊の江戸への出開帳にかかわる史料で、その記録では、道中、行列の「御輿休」を「大和田新田　附木屋儀左衛門」で行っている。附木とは薄い帯状の板に黄燐を塗って巻いたもので、火を移すための生活必需品であり、空にして返す重箱や借りた傘などに付けて謝礼代わりにも用いられた。この附木屋を副業にしていた儀左衛門家は当時、成田山の本尊をお迎えするほどの余裕をもつ家だったと思われる。

また、下野牧の接している村として、野馬除け土手など牧の管理や普請、鹿狩に際しての村人の動員などで各村の名主が寄り合うことも多かったのであろう。その史料のひとつ、表２の No.12 安政元年「下野牧付村々廻状写」では、「大和田新田　山崎屋久兵衛」方へ集まるよう呼びかけている。この山崎屋久兵衛の家は、大和田新田の最も西の角、現在のまるやま食堂の場所にあったといわれ、各村の代表が集まるために便のよいところであった。

屋号調査の聞き取りの過程で、附木屋儀左衛門も山崎屋久兵衛も、それぞれ現代でも屋号として通用していたことがわかり、またその家の元の場所も判明し、屋号地図に記入することができた。

3　佐倉道　北（左）側は旧家の屋敷
南（右）側は牧場跡のマンションや住宅街

4 旧家の方々の語る昔の大和田新田

文書では断片的にしか見えてこない大和田新田の昔の姿も、屋号を手がかりにした聞き取り調査の中で、より具体化し、また文書の世界とは異なるムラの姿も見えてくる。

今回の聞き取り調査では、白井（ゼンベエ）家の富美子さん、現上区区長の中台さん、山田（サヘイ）家の義夫さんご夫妻、湯浅（ジヘイ）家の實さんと奥様、92 歳のたまさん、小林（サヘイジ）家の佐知子さん、鈴木（ジンベイ）家の薫明さんご夫妻、石井（ヤスザエモン）家、市東国昭さんのご当主ほか旧家の皆様にお話をお聞きし、お教えいただいた。

・上区草分けのゼンベエ家のこと

白井富美子さんは、現上区の名主善兵衛家の「跡取り娘」で、大正 12 年 4 月生。菩提寺は吉橋の貞福寺である。白井家は、成田街道の一本松から北へ吉橋に向かう道に入り、現在の東葉高速のガードを過ぎた笹塚というところにある。隣は、分家の「ショウベイ」家だけで、一本松まで人家はなく、笹塚から大和田小学校まで通うのは、子供の足ではたいへんだったとのこと。（写真 4　笹塚のゼンベエ家の森）

4　今もかつての大和田新田の姿が残る笹塚

上区は、「新木戸」「中木戸」「うらまち」に分かれていたが、昭和四年当時、街道筋の集落から離れていたのは笹塚のゼンベエ家とショウベイ家、また通称地名で「二軒家」と呼ばれた中木戸のデンニム家とデンニム新宅家だけであった。

白井家には、「下総を治めよと言われて伊勢からこの地に入植した」という伝承があり、現在は上区の神社である神明社（昭和四年地図では「太神宮」）は、もと白井家の氏神様で、白井家で寄附した神輿があるとお聞きした。

・「馬車の用がいっぺんにできた」新木戸界隈

街道に沿った大和田新田の江戸方面からの入口は、今と同じく八千代・船橋市境の新木戸三叉路である。直進すると大和田新田から佐倉へ、左折すると吉橋を経て木下へ至る分岐点に、吉橋の貞福寺への参詣道を指す道標が立つ。本会が 1998 年から調査し、2001 年に復元設置した「血流地蔵尊道」道標である。また木下道からの正面には「成田山　是より七（里）」の道しるべ」が立っていて、今も昔も、交通の要衝であったことがしのばれる。

5　新木戸交差点付近（東側から）

この三叉路周辺（写真５）にはジヘイ家、ボーヤ家など７～８軒の家があり、船橋方面から殺風景な習志野演習場沿いの下野牧を通ってきた人々は、この人里に至って人心地つく感であったであろう。

ジヘイ家、サヘイ家などでの聞き取りでは、この三叉路の周りには、クラヤ、ボーヤ、カナグツヤの屋号をもつ家があり、「新木戸では、馬車のめんどうがいっぺんにできた」という。馬頭観音の横で営業していたカナグツヤは、近代になって蹄鉄業の発達をになった家で、この辺の馬はみんなここで蹄鉄を打った。

またクラヤは馬の鞍、ボーヤは馬などが曳く荷車の梶棒を扱ったことに由来する屋号であり、いずれも明治ごろからの馬車による運送に深くかかわる業態の屋号であった。

馬による流通は、昭和 12 年（1937）の日華事変まで盛んであったが、その後、軍馬として徴発されると牛車が代用に供され、戦後はトラック輸送の時代へと変わり、やがて屋号にその名残りをとどめるのみとなっていった。

・道しるべを兼ねたお墓の由来

三叉路の北西角のあったジヘイ家はジロエム家の前身の旧家で、本家は高本の湯浅家であった。成田街道をこの角で曲がって吉橋方面へ 300 mほど行くと、ミヤコシというバス停のところに湯浅家の墓地がある。

その中には道しるべを兼ねた文化 14 年（1817）の建立の墓塔があり、わかりやすい大きな字で「右よしはしヨリき於ろし／左たかもと又つぼい／道」の道案内と「教正院法山妙清信女霊位」の戒名、「本家高本三右エ門　大和田新田施主峯吉」の銘文が刻まれている。（写真６）

6　道しるべを兼ねたお墓（A03）

以前から、個人のお墓に道しるべが刻まれていることを不思議に思っていたので、ジヘイ家でお聞きすると、このお墓の主は、ご主人に先立たれたジヘイ家のおばあさんで、「高本のインキョ」家からお嫁にきた方とのことであった。

このおばあさんは、亡くなる前に自分のお墓をぜひ道しるべにしてほしいと言い残され、その遺言に従って、女性一人としてはやや背の高いりっぱな道標兼用のお墓が建てられたとのことである。実家の「高本のインキョ」家とは、表１の No.15 文久４年「生長祝儀并節句覚帳」に「高本隠居三右衛門」とあるので、道標に記された銘文の「高本本家　三右エ門」であろう。

7　坪井町入口の墓地と高本・坪井への旧道

この墓石は、木下街道の拡幅前は、今のバス停

の標識のところにあり、坪井町入り口の三叉路が拡幅されるまでは、墓地の左手の細い路地が高本から坪井へ行く道であったという。ちょうどその角にこのお墓があったわけで、実にわかりやすい的確な場所にあったわけである。（写真７）

妙清信女さんは、生前新木戸三叉路の自宅門前にたって旅人に道案内することが多かったのであろう、没後も人のためにつくしたい一心で遺言されたのであろうか。あるいは晩年ご自分の実家、高本への道が懐かしかったのであろうか。想像はつきないが、旧家の聞き取り調査で、長年の私のなぞもやっと解けた気がした。

・やはりあった大和田新田の水田

上区のジヘイ家・サヘイ家での聞きとりでは、大和田新田の旧家は、数反未満の谷津田をそれぞれ有していた。文書に吉橋村との確執で登場する「石亀沢」のイシガミイケのほか、東葉高速鉄道の車庫となっているハナワヤツ、緑が丘駅前のエンザク（ヤケンヤツ）にも、吉橋村の水田と入り組んで大和田新田の旧家の水田があった。高津村との境でも、現在は高津団地の区画整理で消滅した西高津小学校横のタカツヤツに谷津田があり、また、村境を越して出耕作の田を有しているイエもあり、日大に近い船橋市坪井との境のツボイッタに田を持っていたイエがあった。

古文書から、大和田新田は水田のほとんどない新田村という感を受けるが、聞き取り調査では、各旧家はそれぞれ水田を持ち、コメも充分に作っていたことがわかる。

昔は、必ず水田・畑・ヤマ・竹林の４点セットが備わっていることが農家の条件だったという。特にヤマ（山林）は、肥料や薪の供給源として必須であった。畑では、麦とサツマイモ、祭り用の陸稲のモチ米を主に作っていたが、昭和三十年代ごろからは、高く売れる野菜を作り、クミアイに出荷するようになった。

・通称地名「三軒家」のいわれ

昭和四年地図には、新木戸から木下道に入ってすぐ、坪井町入口三叉路の墓地の手前に「三軒家」の通称地名がある。ちなみに中木戸の２軒しかないデンニム家とその新宅の地名は「二軒家」と呼ばれている。三軒家も３軒の家を意味したのであろうか。

聞き取り調査でわかったことは、戦前から道の西側に、草分けの旧家ではないが３軒の屋敷があったということである。左端はモチヤまたはタテバの屋号の高津の出身の家で、馬方の休憩所である「タテバ」を営み、餅を供していた。現在の坪井道は墓地の右端を左折するが、旧道はモチヤ家と墓地の間の細い道だった。（写真７）

モチヤ家の左隣にはゲンゼム家があった。現在は、奥の畑のほうに転居して今は事業所やアパートなどが建っているが、神社氏子の世話役の一人として活躍されている。その左隣は、カンゼム家で、かつてはイシガメイケにも水田をもっていた。

昭和四年の地図ではモチヤ家の向かい側に小さな家の印があるが、持続的なイエの存在は確認できなかった。戦前の三軒家には木下街道の西側の南から、カンゼム・ゲンゼム・モチヤ（タテバ）の３軒の屋敷が一列に並んでいたのは確かで、三軒家はこの３軒の家を意味していたと思われる。

・「モッタテシンショウ」の中台家

上区の区長の中台さんの先代は、長作の中台家の出身で、大和田新田のコナヤの娘さんと一緒に「モッタテシンショウ」（＝盛りたててたてた身上の意？）とよばれる新宅を建て、そのご子息が現在も酪農を営んでおられる。このイエは特に屋号はなく、今は「中台牧場」または「区長さん」で通っている。コナヤさんは、近代にはうどんをつくっていて、道行く人にも食べさせる商いもしていたそうである。

・「サクノウチ」と下区の旧家

下区では、サヘイジ家、ジンベイ家、ヤスザエモン家、市東家からお聞きした。

下区は十数軒の旧家で構成される。小林（サゴベエ）家は、文書にも大和田新田の名主「佐五兵衛」として登場する旧家で、「サク」または「サクノウチ」とも呼ばれ、「サクノウチが首を縦に振るかで罪人の罰も決まった」という言い伝えもある大地主であったという。明治維新以後も佐五兵衛の子息の佐圓司は地元のために奔走、私塾も開き、没後その業績をしのんで筆子塚が建立された。（P54 佐久間会員の報告を参照）

下区と上区の境界は一本松といわれているが、ジンベイ家のようにその西側、字名が上区の「新木戸前」にあっても、下区に属しているなど、必ずしも屋敷の場所で分けているのではなく、その境ははっきりしない。新宅や分家などは、元の本家の所属するほうの区に入る。

産土神社は、元はサクノウチ（サゴベエ家）の屋敷神であったといわれる八幡神社で、近年、本殿と境内が都市計画道路用地となり、新道の北側に移転改築された。

また、大和田新田の中に寺院はなく、サクノウチ・サヘイジ家は村上の正覚院、ジンベイ家は大和田の円光院などイエごとにちがうとのことであった。

5 屋号からわかる大和田新田のムラの特徴

隣村の高津村や吉橋村などの中世からのムラは、名乗り名を主体とする専業の農家が多く、変動や入れ替わりも比較的少ない。（高津の屋号については、本誌 29 号 P47 の拙稿を参照）

大和田新田では、中台家のような他村からの新宅のほか、佐倉市上座の出身のジョウザヤ、昭和中期以降に江戸川区小松川から来たコマツガワなどの屋号の家もみられる。

また、コメヤ・コナヤ・カラウスヤ・ワタヤ・タバコヤ・カゴヤなどの商いに由来する屋号のほか、クラヤ・カナグツヤ・カジヤ・タテバなど街道筋に特徴的な生業を表す屋号が多く、また名乗り名の屋号のほか副業と思われる「附木屋」（＝ギゼム家）、「大工」（＝カゼム家）、「チョウチンヤ」（＝イソエム家）などの屋号を併用する家も少なくない。

以上のような屋号調査の結果から、①新宅や他地域からの移住した家が比較的多い、②街道に依存する生業が特に多い、③農業（特に水田）への依存度が高くなく、副業が盛んであったなど、古くからムラとは性格が異なる「街道筋の新田村」という大和田新田のムラの姿の特徴が多少でも見えてきたように思われる。

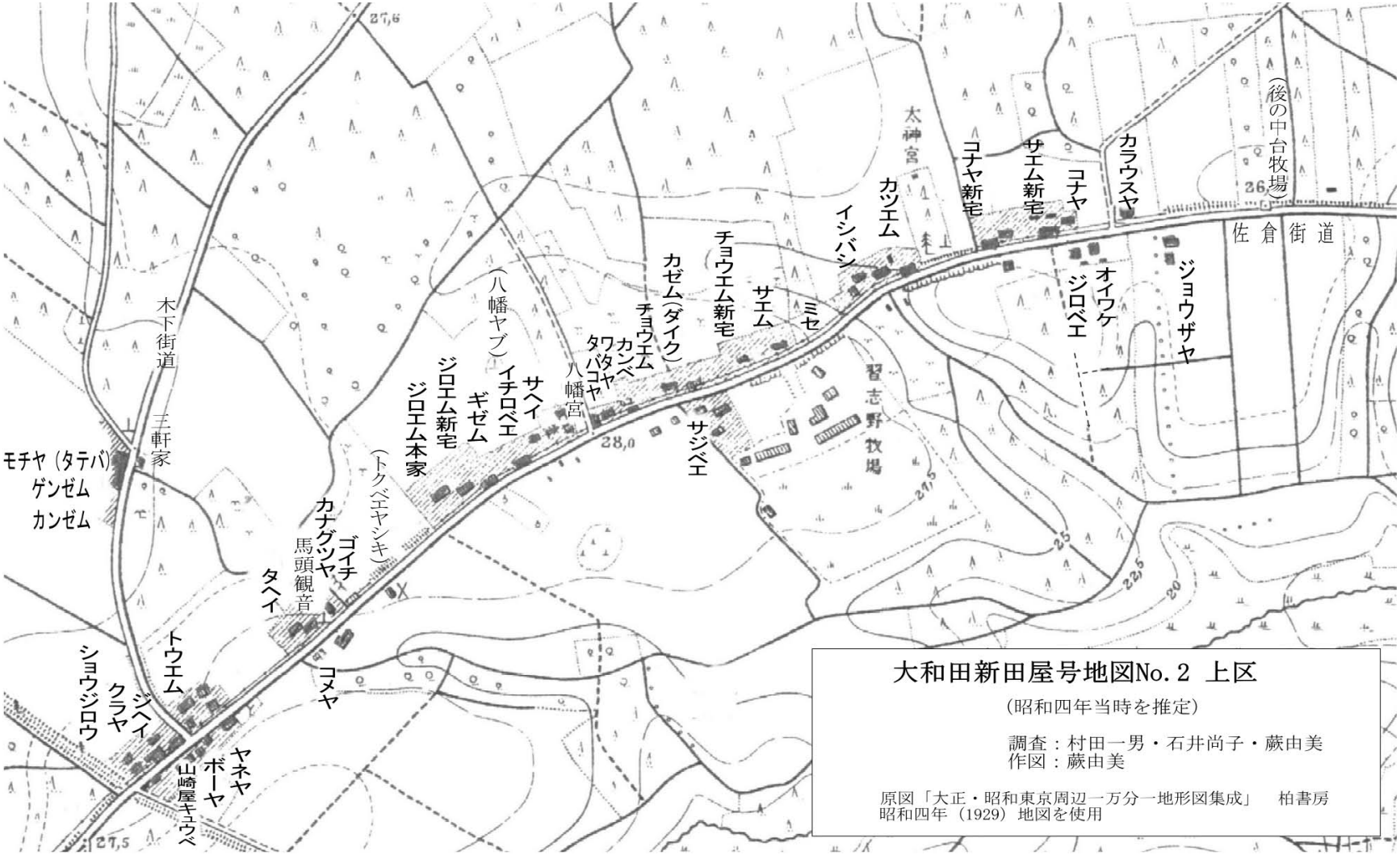
最後に、聞き取りにご協力いただいた大和田新田旧家の皆様、文献資料や屋号調査でご指導いただいた村田一男会長、畠山隆会員、石井尚子会員に謝意を表します。

大和田新田の屋号地図No.1

（昭和四年当時を推定）調査：村田一男・石井尚子・蕨由美　　作図：蕨由美

原図「大正・昭和東京周辺一万分一地形図集成」柏書房　昭和四年（1929）地図を使用

①佐圓司先生碑　②小柴宣雄の墓　道しるべ③成田山A01　④血流地蔵道A02
⑤よしはし・たかもと道（湯浅家墓塔）A03　⑥なりた・米もとミちA09　⑦おたきさん道A11
⑧野馬除け土手

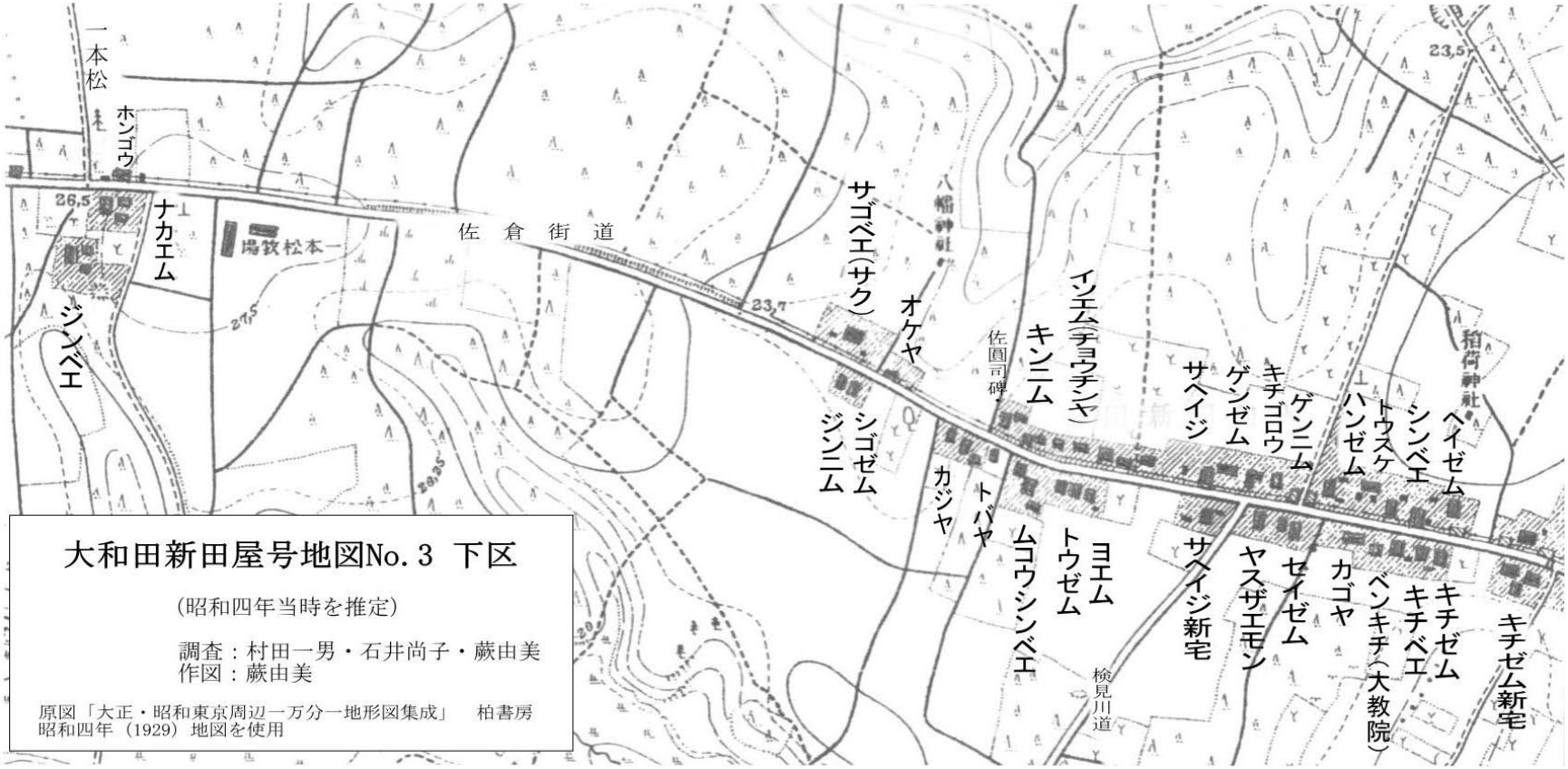


大和田新田屋号地図No. 2 上区

(昭和四年当時を推定)

調査：村田一男・石井尚子・蕨由美
作図：蕨由美

原図「大正・昭和東京周辺一万分一地形図集成」　柏書房
昭和四年（1929）地図を使用



大和田新田屋号地図No. 3 下区

(昭和四年当時を推定)

調査：村田一男・石井尚子・蕨由美
作図：蕨由美

原図「大正・昭和東京周辺一万分一地形図集成」　柏書房
昭和四年（1929）地図を使用